

2024年9月22日聖霊降臨後第18主日説教

知恵の書1章16－2章1、12－22節

ヤコブの手紙3章16－4章6節

マルコによる福音書9章30－37節

本日の福音書は、すこし話が飛んでいます。それは先週の個所が、二か所選択（マルコ8:27-28または9:14-29）であり、また9章1から13節が特定主日の聖書日課自体から省略されていたからです。この9章1から13節は、マルコ福音書という物語において、大きな転換点ともいえる重要な箇所です。ただし、大祭前主日の聖書日課にはなっていますので、聖餐式の中で全く読まれないわけではありません。

その個所とその前後関係について補いますと、先週の箇所でペトロは、「**あなた（イエス様）はメシア（直訳はキリスト）です**」と正しいけれども間違っている答えをしました（マルコ8:29）。正しいけれども間違っているとは、メシア観が違うということです（戦って勝つメシア：ペトロ、受難するメシア：イエス様）。そのあとのお話で、そのペトロの間違いは少しずつ明らかになります。最初にペトロは、イエス様が受難予告をしたとき、イエスをいさめます（直訳：叱ります）。すると、イエス様からペトロが「サタン」呼ばわりされていさめられます（直訳：叱られます）。ペトロはメシアが受難するということが理解できなかった、あるいは受け入れられなかったのでしょう。次に、イエス様がペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて山（タボル山）に登り、その姿が変わったとき、ペトロは三つの幕屋をたてると混乱した発言をします。幕屋とは、主なる神様の臨在場所ですが、そう語った理由は「**ペトロは、どう言えばよいか分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである**」（マルコ9:6）と説明されます。ペトロは、目撃した出来事の意味を理解できなかったのです。おそらく、それ以降その輝く姿のみを受け入れたのでしょう。

さらに先週の選択箇所の一つですが、そこは、イエス様の弟子たち三人が山を下りて来ると、他の弟子たちが霊に取りつかれて、話ができない子どもの癒しに失敗しているところに出会う場面です。イエス様が信仰のない時代を嘆き、弟子たちが密かに自分たちの失敗について訪ねると、「**この種のもの、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ**」（マルコ9:29）と語るのです。弟子たちの失敗は、癒しの力を自分たちの力と誤解して思い上がったことでしょう。弟子たちの力は、弟子たちの能力ではなく、信仰による力であったからです。これ以降、弟子たちの失敗が連続して続きます。すなわち、聖書日課で省略されている9章1節から13節までの箇所は、弟子たちの誤解が具体的に始まる転換点に他ならないです。言い換えれば、読者に対する反面教師としての弟子たちの具体的描写の始まりです。その誤解は最後まで続き、イエス様の逮捕を機に、弟子たちが離散することへとつながるのです。

さて、今日の物語は、エルサレムへの旅の途中の出来事です。イエス様が予告通りに十字架へと向かう旅です。その旅の中で、癒しに失敗した弟子たちは、そのことを反省した様子はありません。イエス様が二回目に受難の予告をなされたとき、「**弟子たちはその言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった**」

(マルコ 9:32) と、メシアの受難の意味を理解しようとしなかったのです。また、カファルナウムに来て家に着いてから、イエス様が「道で何を論じ合っていたのか」と尋ねると、「彼らは黙っていた。道々、誰がいちばん偉いかと言い合っていたからである」(マルコ 9:34) と、堂々と答えられないようなことを議論していたからです(「黙っていた」とあるのは、彼らが、イエス様に叱られそうだということは自覚していたということでしょう)。

そのような弟子たちに対して、イエス様は、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」(マルコ 9:35) と語ります。これは非常に有名な言葉です。ただし、これは単に謙遜でありなさいという教えではありません。主なる神様の御心を行うことと関わっているからです。「この種のもは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」(マルコ 9:29) とイエス様が教えられた通りに、あえて、すべての人の後になり、仕えるものとなる時、自分の力では知ることのできなかった何かを、祈りを通して知ることができる、そして、自分でも思いもしなかった何かができる。イエス様はそのように語っているのです。

これらの教えをわかりやすく伝えるために、イエス様は、たとえとして子どもを用います。「私の名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである。私を受け入れる者は、私ではなくて、私をお遣わしになった方を受け入れるのである」(マルコ 9:37)。この部分は、単に子どもを受け入れなさいと語っているわけではありません。子どもを受け入れる理由は、「私(イエス様)の名のために」であり、子どものために良いからではなく、「私(イエス様)を受け入れる」ことになるからです。さらに「わたしをお遣わしになった方(主なる神様)を受け入れる」ことだからです。この教えは、すこし先の箇所ですが、「よく言っておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(マルコ 10:14) というイエス様の言葉と類似して、子どもを高く評価しています。イエス様が、子どもを高く評価し、あるいは受け入れることを教えるのは、子どもが純粋だからではありません。子どもは、誰かがいなければ生きていけない存在であるからです。そのような子どもを例とするようなあり方は、祈り求めて、主の御心を行うこと、そしてそのようにして神の国を受け入れ実現することと結びついているのです。

大人になるということの意味は、自分で何でもできることとイコールとなる場合があります。確かに、そのことも大切です。しかし、そのことと矛盾しますが、まことの大人は、自分が自分一人では生きられないことを学ぶことが大切なのです。どの世界のどの時代でも、人間は一人では生きられないのです。しかし、そのことがわかっても、自分一人で何とかするということから、なかなか抜け出せない場合があります。あるいは弟子たちのように思い上がり、なんでもなんとかできると思ってしまう場合もあります。だから、祈ることが大切なのです。そこから人間の思いと力を超えた、主なる神様の御心を行うことが始まるのです。今、世界の混乱を治めるには、人間の知恵と力も必要です。しかし、それ以上にわたしたち、主なる神様を信じる者たちが、祈り、互いに助けを求め、道を探ることが求められていると思います。その歩みの先に、主の御心の具体化が必ずあるからです。